

平安京左京北辺四坊八町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京北辺四坊八町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび京都和風迎賓施設建設工事に伴います平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

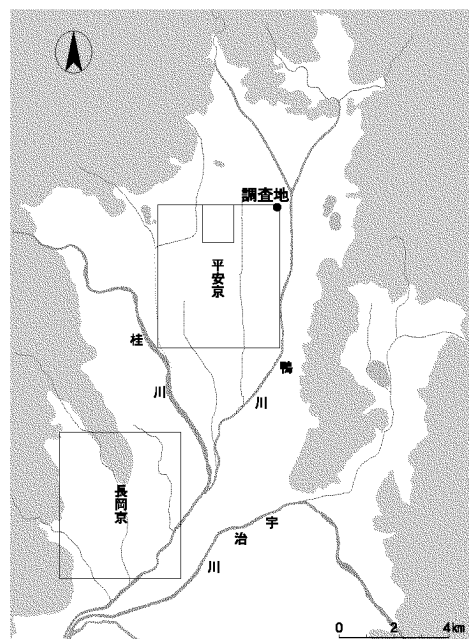
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京北辺四坊八町跡
- 2 調査所在地 京都市上京区京都御苑3
- 3 委 託 者 国土交通省 近畿地方整備局
- 4 調査期間 発掘調査：2003年5月19日～2003年6月23日
試掘調査：2004年3月17日～2004年3月25日
- 5 調査面積 発掘調査：90m²
試掘調査：28m²
- 6 調査担当者 発掘調査：上村和直
試掘調査：加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 発掘・試掘調査ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・上村和直・加納敬二
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 本書作成 加納敬二・上村和直
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地の沿革と既往の調査	2
(1) 調査地の沿革	2
(2) 既往の調査	3
3 . 遺 構	3
(1) 層 序	3
(2) 遺構の概要	4
1) 発掘調査	4
2) 試掘調査	4
(3) 検出遺構	5
1) 発掘調査	5
2) 試掘調査	8
4 . 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
1) 発掘調査	10
2) 試掘調査	10
(2) 出土遺物	11
1) 発掘調査	11
2) 試掘調査	12
5 . ま と め	13

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	発掘調査 1 区	調査前全景 (西から)
		2	発掘調査 1 区	第 1 面全景 (西から)
図版 2	遺構	1	発掘調査 1 区	第 2 面全景 (西から)
		2	発掘調査 1 区	第 3 面全景 (西から)
図版 3	遺構	1	発掘調査 2 区	調査前全景 (北東から)
		2	発掘調査 2 区	第 1 面全景 (北から)

- 図版 4 遺構 1 試掘調査 1 調査前全景（西から）
 2 試掘調査 1 全景（西から）
 図版 5 遺構 1 試掘調査 2 調査前全景（北西から）
 2 試掘調査 2 全景（南東から）
 図版 6 遺物 出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	発掘調査状況（南から）	2
図 3	試掘調査状況（東から）	2
図 4	1区南西壁断面図（1：40）	3
図 5	1区第1面遺構平面図（1：100）	5
図 6	1区第2面遺構平面図（1：100）	6
図 7	1区第3面遺構平面図（1：100）	7
図 8	堀SD52断面図（1：50）	7
図 9	2区遺構平面図（1：100）	8
図 10	土壌SK 5（西から）	8
図 11	試掘 1・2 遺構実測図（1：100）	9
図 12	発掘調査出土遺物実測図（1：4）	11
図 13	試掘調査出土遺物実測図（1：4）	12
図 14	堀SD52と既往の調査（1：1,000）	13

表 目 次

表 1	遺構概要表	4
表 2	遺物概要表	10

平安京左京北辺四条八町跡

1. 調査経過

京都御苑内での京都和風迎賓施設建設工事に伴う発掘・試掘調査である。発掘調査は2003年5月19日から調査を開始し、同年6月23日に終了した。試掘調査は2004年3月17日から開始し、3月25日に終了した。

発掘調査 南側から1区(南北7、東西10) 2区(南北10、東西2)の2ヶ所の調査区を設定した。1区は、江戸時代後期の遺構面(第1面、現地表下約0.2)まで機械掘削し、その後、手掘りで調査を行った。第1面調査終了後、江戸時代中頃の遺構面(第2面、現地表下約0.7)まで掘り下げ、当該期の遺構調査を行った。その後、さらに掘り下げて第3面として、江戸時代前半以前の遺構調査を実施した。各遺構面ごとに平面実測図と写真記録を作成し、最後に断割により下層の状況を確認し、断面写真撮影・断面土層実測などを行い、調査を終了した。2区は、江戸時代後期の遺構面(現地表下約0.6)まで機械掘削し、その後、手掘りで調査を行った。遺構面では、遺構の掘り下げを行ったが、工事による攪乱が地表下0.6までしか及ば

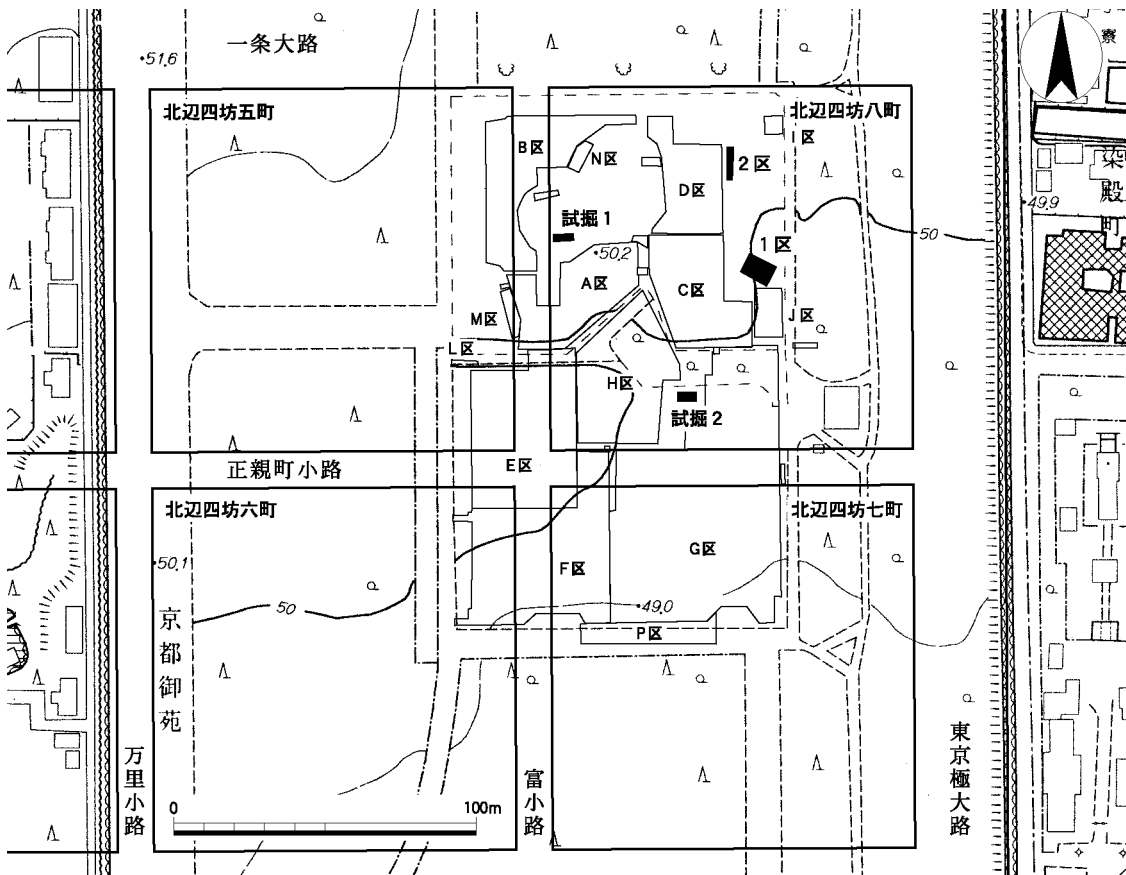


図1 調査位置図(1:2,500) 網掛け部は1997~2002年にかけて実施された調査区

ないため、約0.2 の掘り下げにとどめた。その後、平面実測図と写真記録を作成した。最後に南側で下層の状況を確認し、壁面の遺物採集、断面土層実測などを行い、調査を終了した。

試掘調査 試掘1（南北2 、東西8 ） 試掘2（南北2 、東西6 ）の2ヶ所の調査区を設定した。調査では機械で掘り下げ、断面での観察を主眼に調査を行った。試掘1の調査では壁面が軟弱なため安全確保のため、現地表下1 で幅0.5 の控えを壁沿いに、北と南の両側に設けて2段掘りとした。地山までは現地表下2.2mであった。試掘2では現地表に1.6 上まで工用盛土が広範囲にわたり敷かれていたため、また排土の置場が十分確保できなかったことから、調査区の東半部を中心に調査を行った。

2 . 調査地の沿革と既往の調査

(1) 調査地の沿革

調査地は京都市上京区京都御苑3である。平安京では左京北辺四坊八町にあたり、北を一条大路、西を富小路、南を正親町小路、東を東京極大路に囲まれた町で、調査地はそのほぼ中央部と西部に位置する。当町は、平安時代前期には藤原褒子（藤原時平の娘）の邸宅（京極院）や、藤原顕忠の邸宅（東南部か）があったとされるが、他にどのような人が住んでいたか不明である。平安時代中期後半には源倫子（藤原道長の妻）の西北院の敷地となる。中世以降は当地域の住人を記録した史料はないが、周辺では鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が検出され、高倉通と正親町通に面した上京の東南辺部に含まれ、町屋となっていたことが窺える。室町時代には、この地に一条道場が造られる。室町時代以降、東洞院土御門殿が内裏（京都御所）となり、桃山時代には信長・秀吉による御所修造が行われるのに伴い、周辺に公家の邸宅が建てられ、公家町が形成される。公家町は、万治・宝永・天明と大火に遭うが、その都度再建され、特に宝永の火災後には地割と街路が変更されている。調査地は、この公家町の北東部にもあたり、天保8年（1837）の『禁閤内外全図』には、「堤家」・「甘露寺家」などの邸宅があったことが知られる。明治2年には、天皇が東京に移るに伴い、公家も移ったため空き地となり、その後、公園となり現在に至る。



図2 発掘調査状況（南から）



図3 試掘調査状況（東から）

(2) 既往の調査

調査地周辺では、これまで多くの発掘調査が行われている。八町北端および一条大路の調査では、一条大路の側溝と道路面、および宅地内で平安時代後期から鎌倉時代の遺構が検出されている¹⁾。五町から八町では5回の発掘調査が実施され、古墳時代から江戸時代に至る遺構・遺物を検出し、特に江戸時代の公家の邸宅を良好な状態で検出した²⁾。この調査の内、本調査地の南側・西側で行われた発掘調査(C・G区)では、江戸時代中期から後期の南北街路(二階町通)と、それに面した東側・西側の邸宅と、邸宅内の柵・溝などを検出した。江戸時代前期の南北街路(二階町通)に面した西側の邸宅と、その邸宅西限の溝(背割り溝)、邸宅内の土壌・井戸・柵などを検出した。室町時代後半の土壌・井戸・建物・堀、平安時代後期の庭園に関する斜行溝・土壌、平安時代中期の土壌、古墳時代の土壌などを検出した。今回の調査は、迎賓館関連の8次調査(インフラ関係調査を入れれば)となり、これまでの周辺の調査と合わせて、八町域宅地内の遺構や、近世公家邸宅街の状況を明らかにすることを目的とした。

3. 遺 構

(1) 層 序 (図4)

調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、発掘調査1区の基本的層序は地表面から約0.2mまでがゲートボール場の整地土・現代整地土(第1層)で、第2層は暗褐色泥砂を中心とする土層(厚さ0.25~0.4m)で、第3層は褐色砂泥を中心とする土層(厚さ0.25)である。その下は

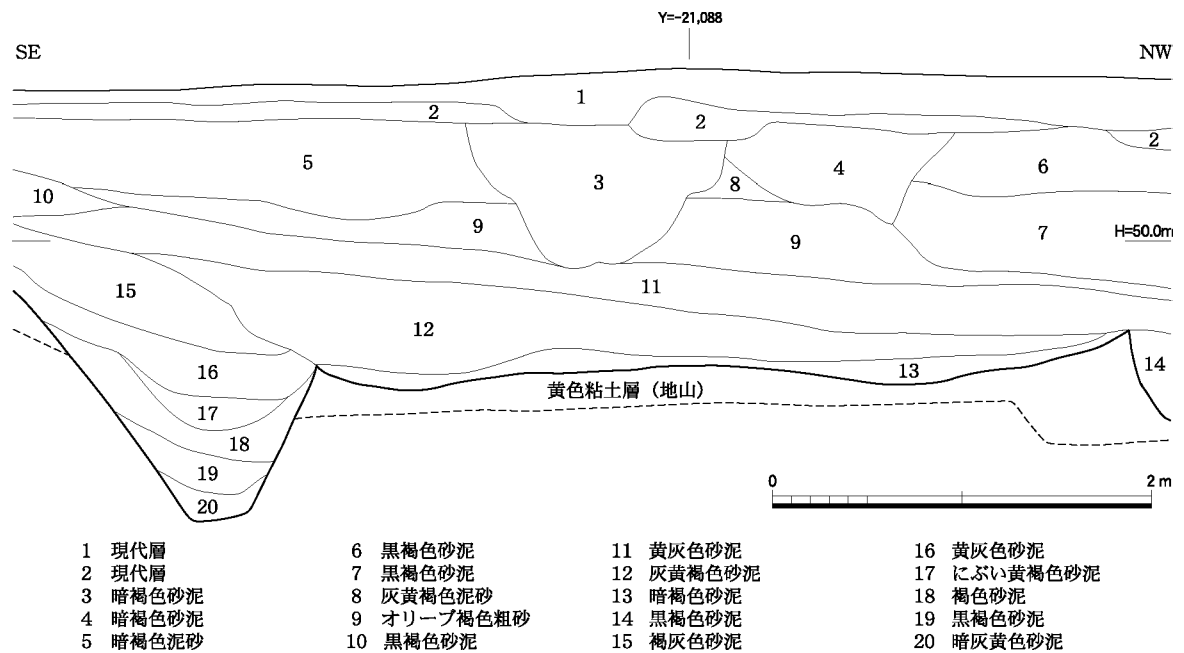


図4 1区南西壁断面図(1:40)

第4層黄色粘土・第5層褐色泥礫で、いずれも無遺物層の地山である。2区も同様の堆積状況である。調査は、第2層上面を第1面、第3層上面を第2面、第4層上面を第3面として、3段階に分けて調査を行った。第1面は江戸時代後期以降の遺構、第2面は江戸時代前半から中頃の遺構が主体、第3面は室町時代から桃山時代の遺構が主体をなす。第3面の検出高は、北端が南端より0.2 高く、北側から南に若干傾斜する地形である。第1・2面も同様に、北側が高く南に傾斜する。第3面上面の標高は、調査区中央で50.1 である。試掘調査については図11で断面を図示した。

(2) 遺構の概要

1) 発掘調査

1区 第1面では江戸時代後半以降の遺構を検出した。遺構には土壇・石室・井戸・柱穴などがあるが、かなり重複している上、調査区が狭いこともあって、規模や平面形は明らかでないものが多い。土壇は調査区全域で検出し、多くはゴミ処理用の穴と推定でき、土器・瓦などが出土した。第2面で江戸時代前半から中頃の遺構を検出した。遺構には土壇・柱穴などがある。土壇は調査区全域で検出した。大半はゴミ処理用の穴であるが、埋土が黄色砂の洪水砂処理用の土壇と推定できるものもある。第3面で室町時代後半から桃山時代の遺構を検出した。遺構には土壇・堀・柱穴などがある。土壇は調査区全域で検出し、大半はゴミ処理用の穴である。

2区 江戸時代後半以降の遺構には土壇・柱穴などがあるが、規模や平面形は明らかでないものが多い。土壇は調査区全域で検出し、多くはゴミ処理用の穴と推定でき、土器・瓦などが出土した。

2) 試掘調査

試掘1 試掘2の北西約70 に位置し、現地に保存予定の大径木に近接している。また1998年に発掘調査したA区にも南接している。地山の黄褐色粘土層を切り込んでいる土壇2基と井戸1基を確認した。

試掘2 2000年に発掘調査したG区の北半部西に接している。G区の調査で検出した江戸時代の南北道路である二階町通の路面層の延長部を検出した。

表1 遺構概要表

時 期	遺 構			
	1区	2区	試掘1	試掘2
室町時代以前	SD52			
江戸時代前半	SK26・27・30・33・39・53		SE1、SK1・2	SK3、路面
江戸時代後半	SK5・6・15・18・22、SE32	SK1～3・5・6		

(3) 検出遺構

1) 発掘調査

1区の遺構

江戸時代後半の遺構(図5、図版1)

土壌SK6 調査区南半部の西で検出した。北側は石室SK5に切られ、南側は調査区外に延びる。残存規模は幅3.5m、長さ1.5m、深さ0.5m。埋土は黒灰色砂泥で、炭・焼土と焼け瓦を多量に含む。

土壌SK15 北半部の東で検出した。北側は調査区外に延びる。規模は幅2.0m、長さ2m以上、深さ0.6m。埋土は黒灰色砂泥で、土師器片と炭が混じり、焼け瓦も多量に含む。

土壌SK18 ほぼ中央部で検出した。西側は石室SK5に切られる。規模は幅2.0m以上、長さ2.5m、深さ0.3m。埋土は黒灰色砂泥で、土壌内から江戸時代後半の土師器と共に京・信楽系の鍋蓋・火入れ、焙烙などと焼け瓦も多量に出土している。

土壌SK22 南半部で検出した。西側は土壌SK6に切られ、幅1以上、長さ0.9mの楕円形で、中央に甕を据える。埋土は炭を含む暗褐色砂泥。

石室SK5 西半部で検出した。円形で径3.3、深さ0.7。一部石組みが残存し、外縁には漆喰の痕跡が認められる。埋土は礫を多く含む黒色泥砂。

井戸SE32 北半部で検出した円形の石組井戸。掘形は径2の円形で、深さ2以上である。

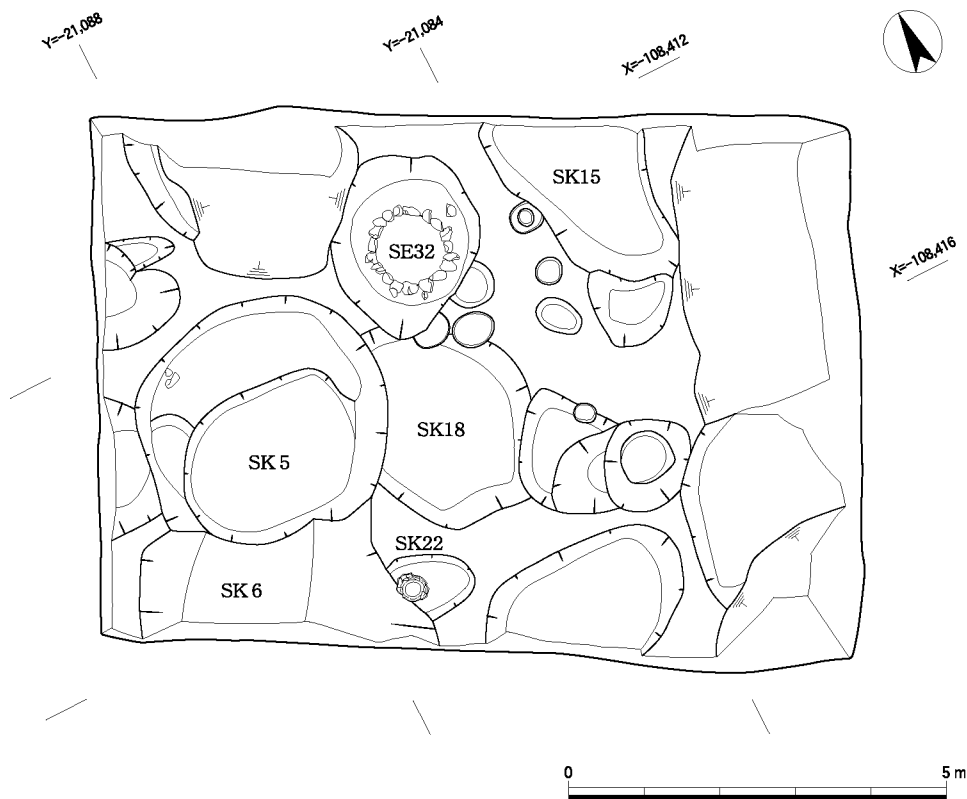


図5 1区第1面遺構平面図(1:100)

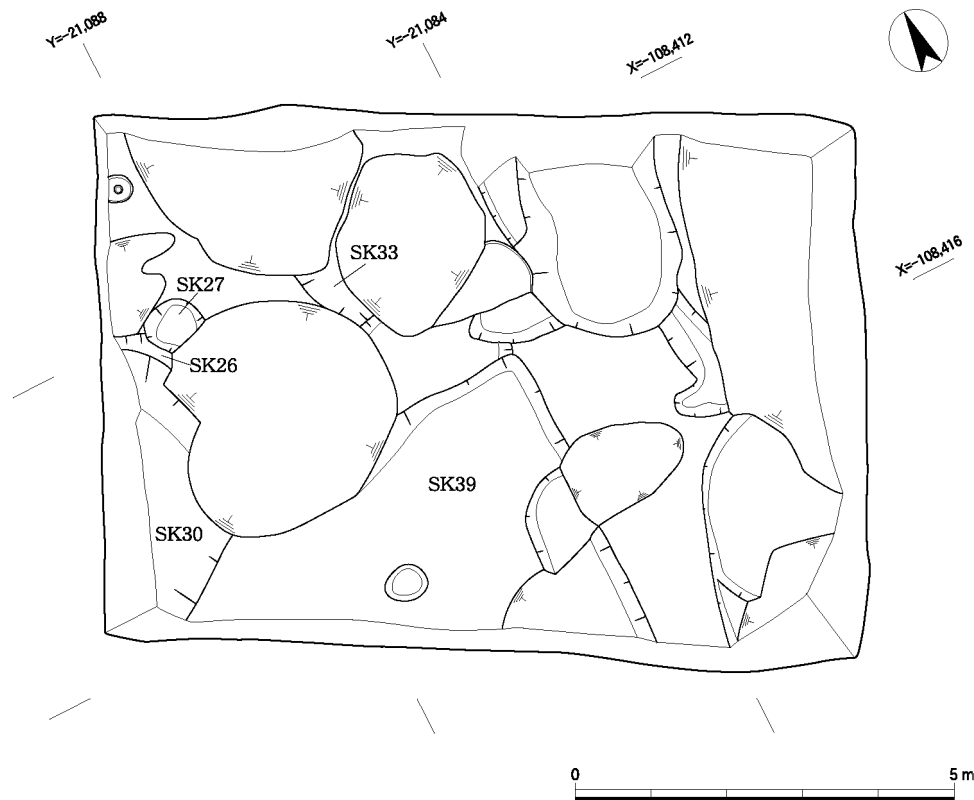


図6 1区第2面遺構平面図(1:100)

石組の内径は0.9mで、0.2~0.3mの河原石を用いて小口面を内側に向け、円形に積み上げている。埋土は灰黄褐色砂泥。

江戸時代前半の遺構(図6、図版2)

土壌SK26 調査区西端で検出した。北・南側は削平され、西側は土壌SK27に切られ、形状は明確でない。残存規模は幅0.2m、長さ0.7m、深さ0.2m。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、土壌内から江戸時代前半の土師器皿と共に肥前系磁器の古九谷様式の皿が出土している。

土壌SK27 西半部で検出した。形状はほぼ円形で径0.7、深さ0.2。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、礫を多量に含む。

土壌SK30 南半部の西端で検出した。大半は削られているが、残存規模は幅3.5m、長さ2.5m、深さ0.2m。埋土は暗灰黄色細砂で、洪水処理用の土壌とみられる。

土壌SK33 北半部で検出した。大半は削られており、残存規模は幅0.5m、長さ1.3m、深さ0.1m。埋土は炭と礫を含む褐色泥砂。

土壌SK39 南半部の西で検出した。西と南側は調査区外に延びるが、残存規模は幅2.3m、長さ4m、深さ0.2m。埋土は黄色砂で、遺物は全く含まれておらず、洪水処理用の土壌とみられる。

土壌SK53 調査区南西部で検出した。大規模な瓦溜で、南側は調査区外に延びる。上面には土壌SK39が重複していたため、第3面で検出している。残存規模は幅3.3m、長さ2m、深さ0.9。埋土は灰黄褐色砂泥で、埋土中に瓦を多量に含む。

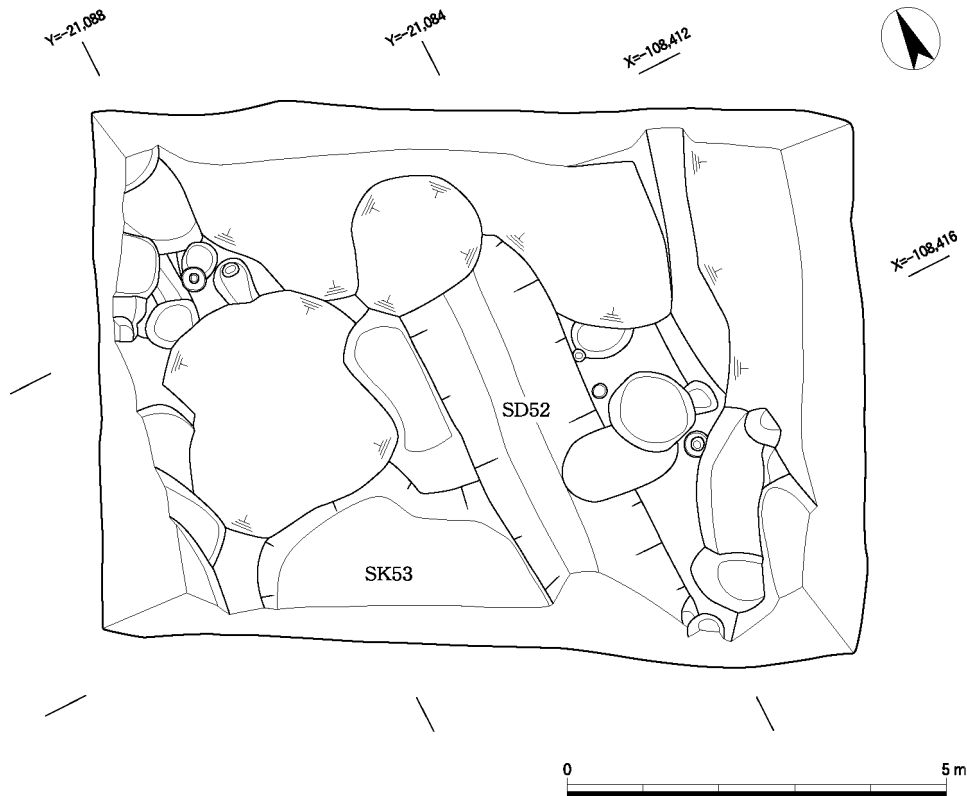


図7 1区第3面遺構平面図(1:100)

桃山時代以前の遺構(図7、図版2)

堀SD52(図8) 中央部で検出した。堀の方向は南北に延び、約6m 検出したが北で止まる。素掘りで両肩部は急傾斜で立ち上がり、底部は平坦である。規模は東西幅1.35m、深さ約1.6m。埋土は2層に分かれ、上層が褐灰色砂泥で炭を少量と礫を多く含む、下層は黄褐色砂泥層で黄色粘土ブロックを含む層で、東から流入する。底部に泥土は堆積しておらず、堀は基本的に空堀と推定できる。上・下層からは室町時代後半から桃山時代の土師器皿、瀬戸・美濃系の皿、瓦器羽釜などが出土している。

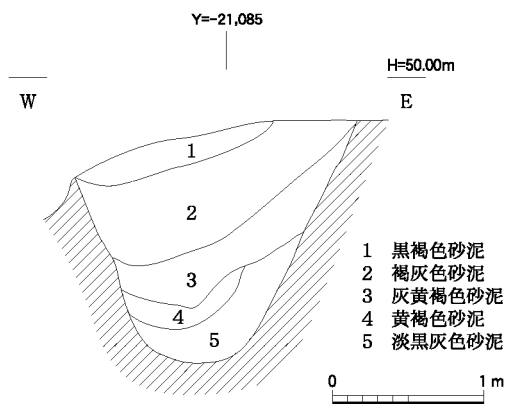


図8 堀SD52断面図(1:50)

2区の遺構

江戸時代後半以降の遺構(図9、図版3)

土壌SK1 調査区の北端で検出した。北側は調査区外に延びる。残存規模は幅1.5m、長さ2m、深さ0.2m。埋土は灰黄褐色砂泥で瓦を多量に含む。

土壌SK2 調査区の北側で検出した。北側は土壌SK1に切られ、東側は調査区外に延びる。残存規模は幅1m、長さ2.5m、深さ0.3m。埋土は暗褐色砂泥で、焼土・炭・瓦を多量に含む。

土壌SK3 ほぼ中央部で検出した。北側を土壌SK2に切られ、西側は調査区外に延びる。残

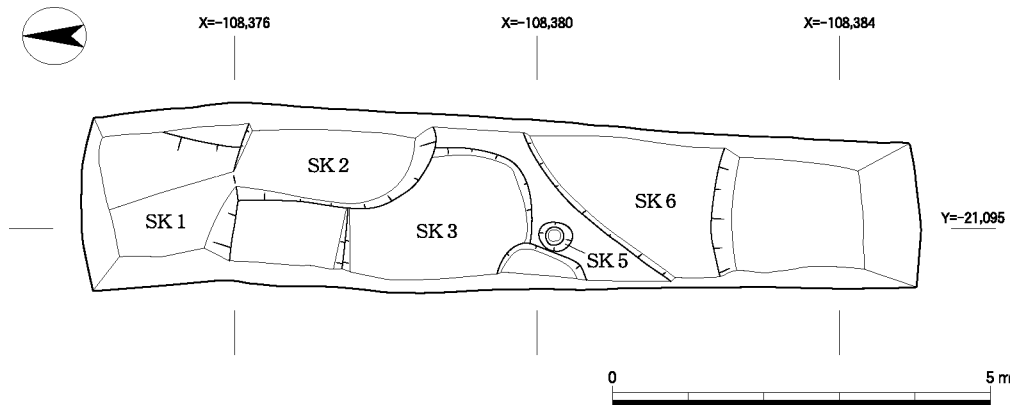


図9 2区遺構平面図(1:100)



図10 土壙SK 5 (西から)

存規模は幅1.6m、長さ2.5m、深さ0.35m。埋土は暗褐色砂泥で、焼土・炭と瓦を多量に含む。

土壙SK 5 (図10) ほぼ中央部で検出した。円形で、規模は径0.4、深さ0.2。土壙内の中央底部に大型壺を口縁部を上にして据え、蓋を被せて外容器としている。埋土は灰褐色砂で炭を含み、中に内容物の小型壺を口縁部を上にして据えていた。

土壙SK 6 南半部で検出した。ほとんどが調査区外に延びる。残存規模は幅1.6m、長さ2.5m、深さ0.2m。埋土は黒灰色砂泥で焼土・炭と瓦を多量に含む。

2) 試掘調査

試掘1の遺構(図11、図版4)

土壙SK 1 調査区東端で検出した。規模は北壁断面から東西幅が2.3以上、深さは1.5m。埋土は3層に分かれる。

土壙SK 2 ほぼ中央から西にかけて検出した。規模は幅3以上、深さが0.5m以上である。埋土は灰黄褐色砂泥。埋土からは平安時代から江戸時代までの遺物が出土している。

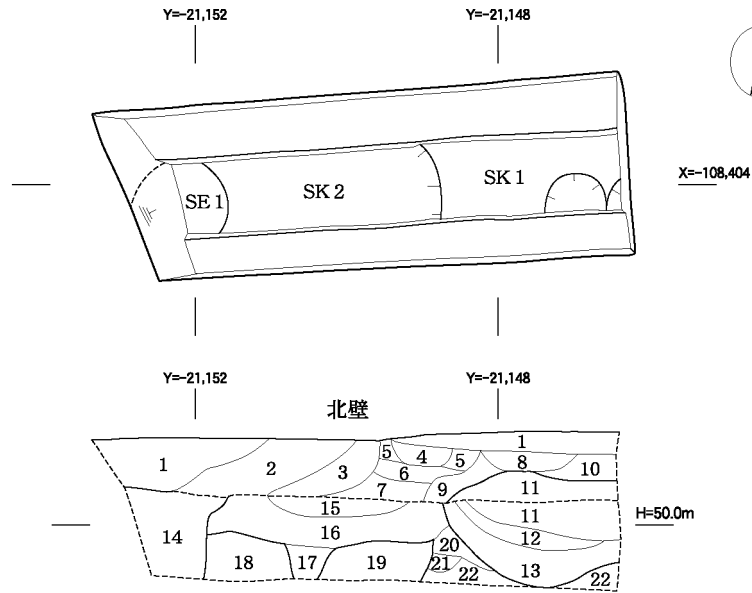
井戸SE 1 西端で検出した。円形石組の井戸で西側は調査区外に延びる。掘形が径1.5m以上の円形で上位から石組が残存しており、深さは検出面から2.2m以上であった。埋土は暗褐色砂泥で、焼土・炭と江戸時代前期から中期の土師器皿・肥前系磁器の皿・棟丸瓦などが出土している。

試掘2の遺構(図11、図版5)

土壙SK 3 調査区西端で検出した。規模は幅0.8以上、深さ1。埋土は4層に分かれ、最下層からは江戸時代前期の土師器皿が出土している。

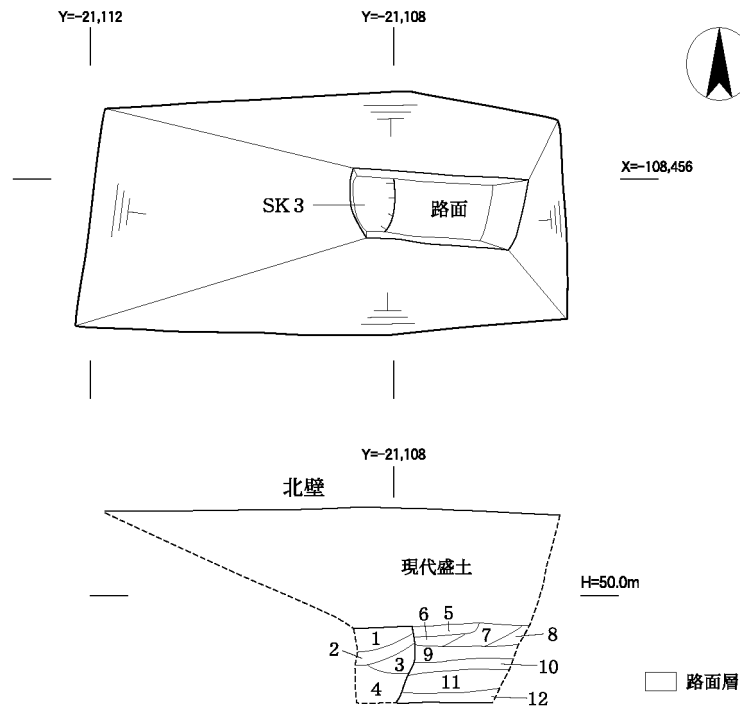
路面 現代盛土と近代層の下約1.8で、路面層を確認した。路面層は厚さ0.6mで4層に分かれ、いずれも小礫を堅固に敷き詰めた状態であった。

試掘 1



- | | | |
|------------|------------------|------------------|
| 1 暗褐色砂泥 | 9 褐色砂泥 | 16 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 暗褐色砂泥 | 10 暗褐色泥砂 | 17 暗褐色砂泥 |
| 3 暗褐色砂泥 | 11 黒褐色泥砂 (SK 1) | 18 灰黄褐色砂泥 (SK 2) |
| 4 暗褐色泥砂 | 12 暗褐色泥砂 (SK 1) | 19 灰黄褐色砂泥 (SK 2) |
| 5 黒褐色砂泥 | 13 灰黄褐色泥砂 (SK 1) | 20 にぶい黄褐色砂泥 |
| 6 暗褐色泥砂 | 14 暗褐色砂泥 (SE 1) | 21 にぶい黄褐色泥砂 |
| 7 にぶい黄褐色泥砂 | 15 褐色泥砂 | 22 褐色砂泥 |
| 8 暗褐色泥砂 | | |

試掘 2



- | | | |
|-----------------|------------|----------------|
| 1 暗褐色砂泥 (SK 3) | 5 暗褐色砂泥 | 9 褐色泥砂 (路面層) |
| 2 黒褐色砂泥 (SK 3) | 6 にぶい黄褐色砂泥 | 10 暗褐色砂礫 (路面層) |
| 3 灰黄褐色砂泥 (SK 3) | 7 暗褐色砂泥 | 11 暗褐色砂礫 (路面層) |
| 4 暗褐色砂泥 (SK 3) | 8 暗褐色砂泥 | 12 暗褐色砂礫 (路面層) |



図11 試掘 1・2 遺構実測図 (1 : 100)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

1) 発掘調査

出土遺物は整理箱に20箱である。江戸時代のものが大半を占め、他の時期の遺物は少量である。土器類が大半で、瓦類は少ない。

平安時代 土器類、瓦類が少量ある。すべて中世以降の遺構に混入して出土した。土器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器などがある。瓦類には軒平瓦がある。

鎌倉時代から桃山時代 土器類、瓦類がある。土壌・堀・柱穴・包含層から出土した。土器類には、土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器などがある。土師器皿類が大半を占める。

江戸時代以降 土器類、瓦類があり、土壌・井戸・柱穴・包含層から出土した。土器類には、土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などがある。土師器皿類が大半を占め、鍋・焼塩壺・焼締陶器壺・播鉢、施釉陶器椀・鉢・壺、染付・青磁・白磁椀などがある。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟丸瓦などがあり、瓦溜からまとめて出土した。

以上の内から1区の第1面では土壌SK18、第2面では土壌SK26、第3面では堀SD52からの出土遺物について図12に示し、概述する。

2) 試掘調査

出土遺物は整理箱に1箱である。江戸時代が大半を占める。他には平安時代から鎌倉時代のものがあるが少量である。

平安時代 土器類、瓦類があるが少量である。すべて江戸時代の土壌から出土している。土器類には土師器・須恵器・緑釉陶器などがある。

鎌倉時代から桃山時代 土壌1・2から出土した土器類であるが、混入とみられる。土師器・焼締陶器・磁器・瓦器などがある。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	土師器、須恵器、緑釉陶器、軒瓦	0箱		0箱	0箱
鎌倉時代～桃山時代	土師器、須恵器、陶器、磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類	2箱	土師器6点、瓦器1点、陶器1点	1箱	0箱
江戸時代以降	土師器、陶器、磁器、瓦類、砥石、硯、石臼	20箱	土師器18点、土師質土器1点、陶器2点、磁器3点、棟丸瓦1点	6箱	14箱
計		22箱	33点(1箱)	7箱	14箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

江戸時代以降 土器類、瓦類がある。井戸1・土壌1～3から出土した。土器類には土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などがある。土師器皿が大半を占める。瓦類には棟丸瓦がある。

以上の内から井戸SE1、土壌SK3からの出土遺物について図13に示し、概述する。

(2) 出土遺物

1) 発掘調査

土壌SK18 (図12、図版6 1～6)

(1～3)は土師器皿である。いずれも白色系の皿で1・2は口径7.4cm・8.0cm、器高1.3cm・1.5cmの小型皿である。3は口径12.0cm、器高1.9cmの大型皿である。京都 中期中～新に属する³⁾。

(4)は土師質土器の焙烙である。口径27.0cm、器高3.5cm以上である。外形の成形は型作りで、口縁直下に突帯状の張り出しをもつ。器壁は下半ほど薄い。大阪府枚方市津田産で、産地分類からG類に属する⁴⁾。

(5)は口縁端部を除き全面に施釉された京・信楽系の灰釉陶器の鍋蓋である。口径12.8cm、器高3.0cmである。(6)は京・信楽系の灰釉陶器の火入れである。口縁部5ヶ所が内側に押さえられており、口縁端部内面から体部外面下半には灰釉が施され、体部外面には鏝絵で笹ノ葉文様が描かれている。また底部外面には目痕が残る。口径10.4cm、器高7.1cm。

土壌SK26 (図12、図版6 7～14)

(7～12)は土師器皿である。7は口径6.0cm、器高1.3cmの小型皿である。8～10は口径9.0～

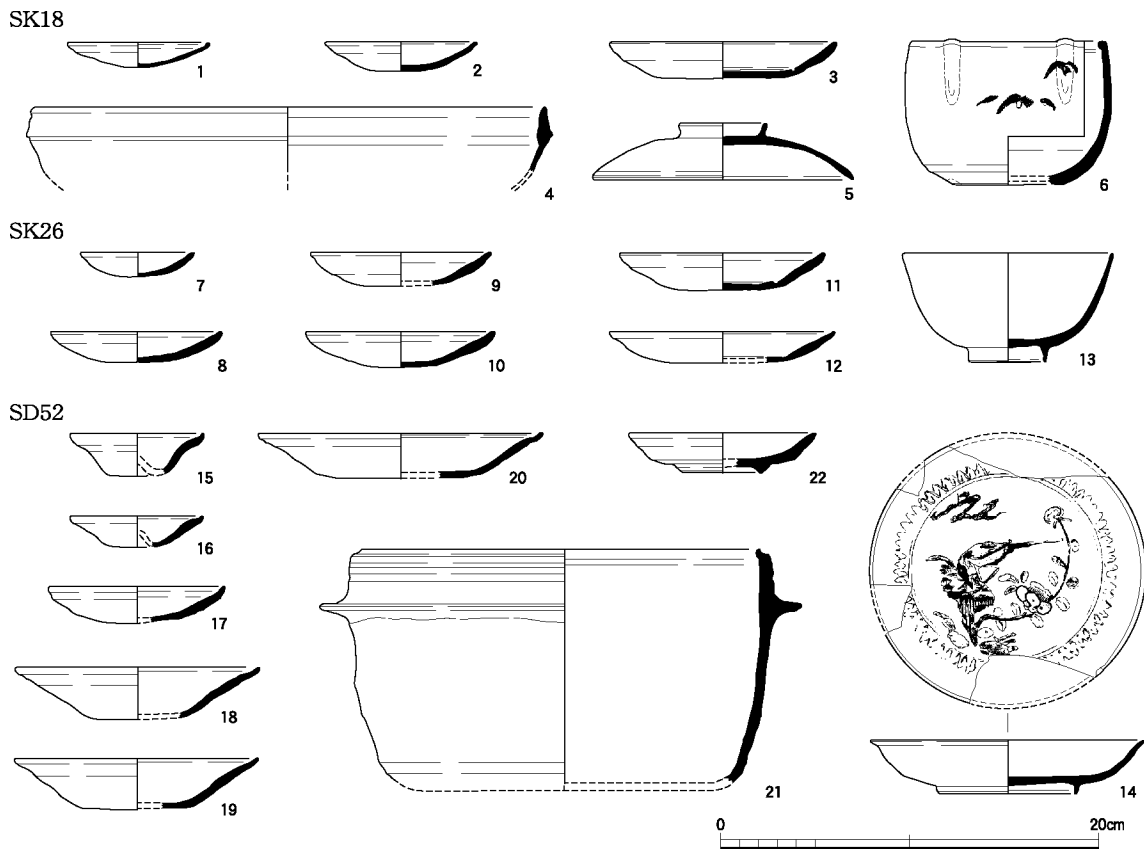


図12 発掘調査出土遺物実測図 (1:4)

10.0cm、器高1.6～2.3cmの中型皿である。11・12は口径10.8cm・12.0cm、器高2.0cm・1.6cmの大型皿である。京都 期古～新に属する。(13)は肥前系磁器の白磁椀である。高台端部を除き全面に白濁した白磁釉が施されているが、細かい貫入が目立つ。口径11.2cm、器高4.0cm。(14)は肥前系磁器の古九谷様式の皿である。乳白色の白磁の素地に内面には色絵で岩・鳥・花・雲が、褐・青・赤・黄彩で描かれている。その周囲には赤彩で二重圏線と、その外周には鋸歯文に似た幾何文様が巡る。高台部外面には二重圏線と近くに一条の圏線が、また高台部内面にも一条の圏線が巡る。口径14.4cm、器高2.35cm。

堀SD52 (図12、図版6 15～22)

(15～20)は土師器皿である。15～17は口径7.0～9.2cm、器高1.6～2.3cmの小型皿である。18～20は口径13.0～15.0cm、器高2.4～2.7cmの大型皿である。京都 期新～期古に属する。(21)は瓦器の羽釜である。口径21.6cm、器高12.7cmある。外面は指オサエで調整し、内面は横方向にナデる。底部は欠損しているが、残存する形状から平坦に作られていたと推定される。口縁部や鐙の成形は雑である。(22)は瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿である。全面に緑灰色の釉が施されている。胎土は白色で粗い。口径10.0cm、器高2.1cm。

2) 試掘調査

井戸SE1 (図13、図版6 23～29)

(23～27)は土師器皿である。23・24は口径9.0cm・10.0cm、器高1.6cm・1.7cmの小型皿である。25は口径11.0cm、器高2.3cmの中型皿で、内面には圏線が巡る。26・27は口縁がともに12.0cm、器高2.2cm・1.9cmの大型皿である。内面にはともに圏線が巡る。京都 期古～中に属する。(28)は肥前系磁器の皿である。高台外面を除き白濁色の釉が施されているが、内面は見込みに蛇ノ目釉剥ぎがなされ、重ね焼きの圧痕が残る。口径13.0cm、器高3.7cm。(29)は棟丸瓦である。瓦当文様は菊花文。凹弁10葉二重菊で、間弁は凹弁の菊花文で周縁はない。

土壌SK3 (図13 30～33)

(30～33)は土師器皿である。30は口径5.2cm、器高1.0cmの小型皿である。31・32は9.4cm・10.0cm、器高1.7cm・1.9cmの中型皿である。33は口径12.0cm、器高1.9cmの大型皿で、内面に浅い圏線が巡る。京都 期古に属する。

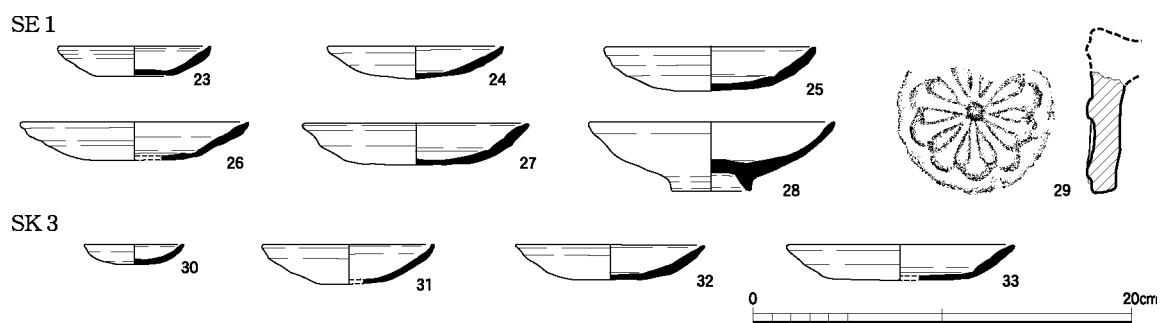


図13 試掘調査出土遺物実測図(1:4)

5.まとめ

調査地は平安京左京北辺四坊八町跡に推定されている。当地では平安時代前期には藤原褒子（藤原時平の娘）の邸宅（京極院）が、中期から後期は藤原頼通により再建された西北院があったとされている。既調査においては平安時代後期の北東から南西方向の溝を検出し、西北院の園池に流れ込む溝として考えられている。今回の調査では平安時代の遺構は検出できなかったが、発掘調査1区で平安時代中期から後期の土師器・須恵器・緑釉陶器などが中世の遺構から出土しており、関連する遺構は削平されたことが推定される。

鎌倉時代から室町時代前期の遺構は、土壌などがあるが極めて少なく、遺物も江戸時代以降の遺構に混在して出土しており、出土量も少ない。周辺の先行調査でも遺構の数が少なく、江戸時代以降の大規模な遺構により、削平された可能性が高い。

室町時代には調査地一帯は町屋化していくが、応仁の乱から室町時代末期にかけては、当地を含む禁裏（御所）周辺に濠を掘らせ整備させている。当該期の遺構としては発掘調査の1区で検出した堀SD52がある。この南北堀は、先行調査のG区堀G2630・J区堀J87に接続するもので、総延長60mで、1区北側で止まっている。堀は空堀で東側に土塁があったと推定できる。堀G2630の南に位置する堀G965は東西方向で総延長29mで、この堀は正親町小路北側溝に重複している。また堀SD52が途切れた西側のC区北半では、東西方向の溝C1159が断続しながらも7 検出されている。それらの堀・溝を繋いだ一画内では、宅地を構成する建物・堀・井戸・土壌などが検出されている。また堀は形態や規模からも中世の上京域でみられるA型式に属し、⁵⁾ 防御性の高い性格が考えられる。堀SD52からは出土遺物は少なく、かなり短期間で埋め戻されている。出土した土師器皿の年代が京都 期新～ 期古（15世紀後半～16世紀初め）であることから、応仁の乱または天文法華乱に関係している可能性が高い。

桃山時代は当地一帯では天正17年（1589）の新造御所の築造から慶長10年（1605）徳川幕府の院御所建設により公家町形成が完了する。以後、江戸時代を通して調査地周辺は、大規模な火災などを契機として公家の宅地の様相を変えていく。

江戸時代初期の遺構としては、発掘調査の1区で検出した土壌SK26・53などがある。土壌SK26からは肥前系磁器の古九谷様式の色絵付けの皿が出土している。京都市内でも出土例は少なく、公家町の調査においても、5次調査のM

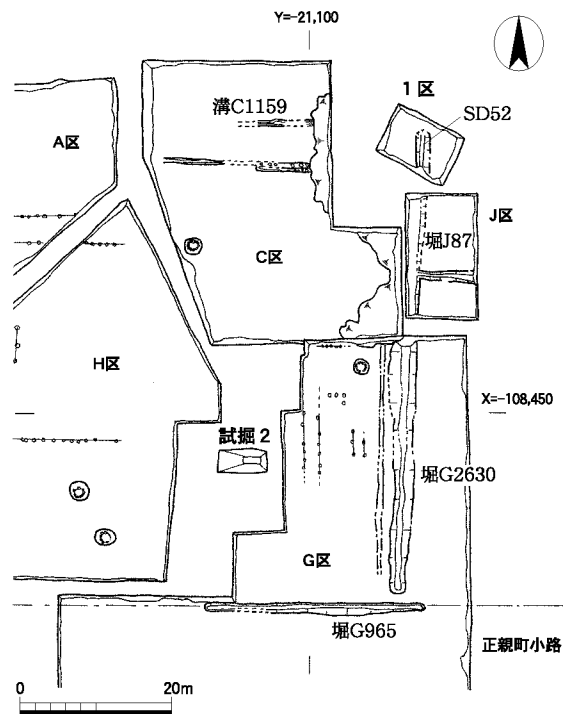


図13 堀SD52と既往の調査（1：1,000）

区での皿片の出土にとどまっている⁶⁾。土壌SK53は大規模な瓦溜で、焼けた瓦を多量に含み、出土土器から考え、宝永の大火の後の整理土壌と推定できる。調査地西部で検出した黄色砂の堆積した土壌SK30・39は瓦溜を覆っており、宝永後の洪水砂処理用の土壌と考えられる。試掘調査2ではG区とC区で検出された二階町通（南北街路）の路面部を検出している。先行調査や文献史料から、発掘調査1・2区は二階町通西側、試掘調査1区は東側の宅地内にあたる。西側は1区が近衛家跡、2区と試掘調査1区は園家跡と推定できるが、宅地内の建物配置や具体的な状況は明らかではない。

江戸時代後半の遺構としては土壌・井戸・柱穴などがあり、遺構が重複し、出土遺物も多く、活況を呈していた状況が窺える。発掘調査1区では土壌SK6・15・18などは焼土・炭とともに、焼けた瓦も含んでいた。出土土器から考え、天明の大火後の整理土壌とみられる。先行調査や文献史料から、調査地は宝永の大火の後に西へ移動した二階町通（南北街路）東側の宅地内にあたり、発掘調査1区は三室戸家跡、2区は高松家跡、試掘調査1は園家跡に推定できる⁷⁾。試掘調査1では江戸時代後期の石組井戸SE1と江戸時代前期の土取り穴とみられる土壌SK1・2を確認した。近接するA区の調査でも江戸時代前期の整地層と共に土取り穴を検出しており、公家町再建・修復などに関連して地山とみられる良質な黄褐色粘土を採取したことが考えられる。また石組井戸は園家に関わる井戸の可能性が高い。

調査地一帯は公家町として明治2年（1869）東京遷都まで存続していたが、東京への移転後は昭和3年の昭和天皇の即位礼を経て、饗宴殿跡グラウンドとして現在に至っている。

註

- 1) 近藤喬一・松井忠春「平安京東北隅一条大路・東京極大路」『古代文化』第27巻6号 古代学教会 1975年
- 2) 『平安京左京北辺四坊 第1・2分冊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 3) 土師器皿の編年型式は当研究所の『研究紀要』第3号に掲載された「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」での型式編年を用いた。
- 4) 難波洋三「津田の土器作り」『四国と周辺の土器 炮烙の生産と流通 発表要旨 資料集』 四国徳島城下町研究会 2001年
- 5) 山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 6) 2)の第2分冊 第9章「第1節 土器・陶磁器類」のH・M・N区のその他の項（189頁）で古九谷様式の皿片（図版532-14）出土が概述されている。
- 7) 2)の第2分冊 第7章「第2節 古絵図からみた調査地付近の街路と宅地割」で宅地割の変遷が述べられている。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうほくへんしぼうはっちょうあと							
書名	平安京左京北辺四坊八町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-9							
編著者名	加納敬二・上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ほくへんしぼう 北辺四坊 はっちょうあと 八町跡	きょうとしかみぎようく 京都市上京区 きょうとぎょえん 京都御苑	26100		35度 01分 21秒	135度 46分 08秒	発掘調査 2003年5月 19日～2003 年6月23日	90㎡	京都和風 迎賓施設 建設工事
						試掘調査 2004年3月 17日～2004 年3月25日	28㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 北辺四坊 八町跡	都城跡	室町時代 ～桃山時代	堀	土師器、瓦器、陶器				
		江戸時代前半	土壇、井戸、路面	土師器、磁器、棟丸瓦				
		江戸時代後半	石室、土壇、井戸	土師器、土師質土器、 陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-9

平安京左京北辺四坊八町跡

発行日 2004年3月25日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961